

## コラム

## 世界のクルド研究の現状

今井 宏平

## ●クルド研究のパイオニア

クルドに関する研究は、ここ10年ほどで大きく進展している。もちろん、その下地は徐々に作られてきた。クルド研究のパイオニアとなったのが、ワディエ・ジャワイデ (Wadie Jwaideh) とマルティン・ファン・ブライネセン (Martin van Bruinessen) であった。ジャワイデの博士論文『クルド国家運動：その起源と発展』(1958年) とブライネセンの博士論文『アガー・シャイフ・国家：クルディスタンの社会・政治構造』(1978年) はクルド研究の道筋を作った作品として高く評価されている。一方で、トルコをはじめ、クルド人およびクルド問題に触れること自体がタブーとされてきた1980年代までは、それらに続く研究はなかなか出てこなかった。

## ●1990年代以降活性化したクルド研究

1990年代に入り、トルコでもクルド人の存在およびクルド問題に注目が集まるようになると、非合法武装組織であるクルディスタン労働者党 (PKK) に関する研究、クルド問題をめぐるトルコ、イラク、シリアの関係などがクローズアップされるようになった。PKKに関する先駆的な研究は、イスメット・イムセット (İsmet İmset) の『PKK：トルコにおける分離主義者の暴力の報告』(1992年) であり、この本を皮切りに、英語とトルコ語で多くのPKK関連の本が出版されるようになった。最近では、トルコの著名なジャーナリストの1人であるフィクレット・ビラ (Fikret Bila) がPKKのイデオロギーを扱った『PKKのイデオロギーコード』をトルコ語と英語の両言語で出版している。また、地域に跨るクルド問題に関しては、ジャワイデの弟子であるロバート・オルソン (Robert Olson)、テネシー工科大学のマイケル・ギュンター (Michael Gunter) などが精力的に論文を執筆してきた。

こうした傾向は現在でも継続している。たとえば、クルド問題に関する英語文献、特に若手研究者の博士

論文がルートリッジ社からしばしば出版されている。また、トルコの社会科学を中心とする学術書の出版社として有名なイレティシム社 (İletişim) から、クルド問題に関する良書が定期的に刊行されている。1990年代までは、クルド問題には常にクルド人、特にPKKを支持するかしんないかというスタンスが問題となったが、近年は価値中立的で学問的な研究が数多くみられるようになってきている。

## ●クルド研究のプラットフォーム

クルド研究の進展とともに、各国でその中心となる大学や機関も登場した。イギリスで主導的な役割を果たしているのが、エクセター大学のクルド研究センターである。同センターは2006年にアラブ・イスラーム研究機関の傘下に設立され、現在では北イラクの専門家であるギャレス・スタンスフィールド (Gareth Stansfield) をはじめ、専任の教員が3名おり、クルド語 (クルマンジー) の習得、政治学・社会学・文学の視点からのクルドに関する研究が盛んである。また、クルド研究センターが中心となり、これまで2009年、2012年、2015年、2017年と4回にわたり、クルド研究の国際大会を開催している。第1回大会の後には、クルド研究のプラットフォームとして、クルド研究ネットワークが立ち上げられ、現在では1000名以上が参加している。同ネットワークは査読付き雑誌 *Kurdish Studies* を2013年から毎年2回発刊している。

アメリカでは中央フロリダ大学 (University of Central Florida) の政治学部でクルド政治研究プログラムが設置され、ギュネシュ・ムラト・テズジュル (Güneş Murat Tezcür) が中心となり、クルド研究が盛んになりつつある。また、パイオニアの1人として名前を挙げたブライネセンの出身地、オランダでもワーヘニンゲン大学助教授のヨースト・ヨンガーデン (Joost Jongerden) など、彼の弟子たちがクルド研究を牽引している。日本でもアジア経済研究所が2015年度から今年度 (2017年度) まで、「中東における国民国家モデルの溶解と新たな地域秩序の可能性」という政策提言研究の分科会の1つとして、「中東地域の政治的安定に果たすクルド問題の位置づけ」を立ち上げ、クルド研究の基礎的知識の蓄積に努めている。

(いまい こうへい／アジア経済研究所 中東研究グループ)